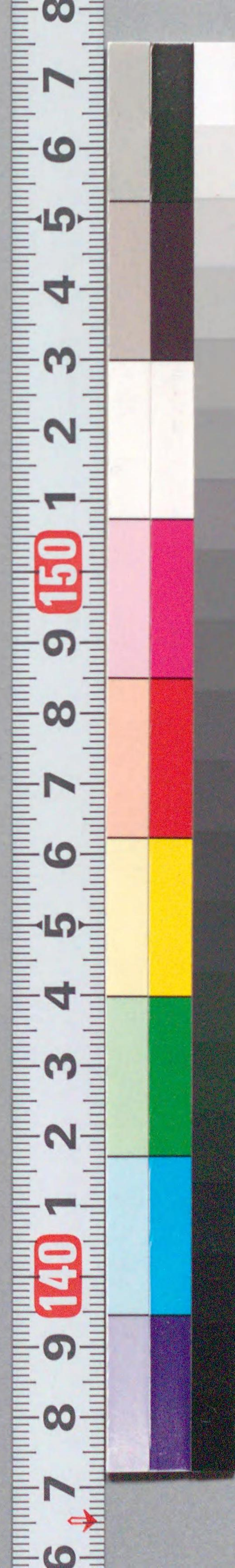


柳横櫛

初編  
中

208  
15  
751



国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用



夜三  
通月 柳横櫛初編卷之中

東都

梅亭金鷲編次



第三回

子なるや蔓一筋のまろ修より

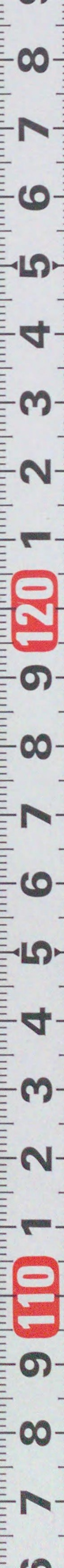
大正

3. 25

購求

人押え

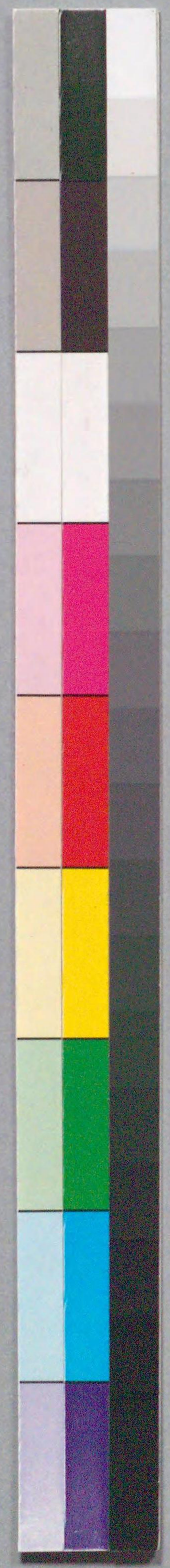
安の節の此時ふ取出しる類根と元のささり人押え  
毛猪にふ次るその酒と只一トはみぢうと降り丈六の  
俵とさしり出るるコト勝予使くらる事タアん世の儼  
人み引ッちをまて一盃のこみ出ろけとあが酔とおぶの  
大月上戸で四文八文をらむと散紋を成さるんごう





今日の唐人のお尻でからつけのと名目が愛りまき菜ふ  
後でんろりく人窮く悪とさくらむとのお油  
さんの造云どりトの外の外も後人家の若旦那が正月  
時分咲花町の米屋の阿嬭と情合が出来と遠へ  
とあつことかあつたあが若旦那の病氣中候花町の米  
屋のお湯ふまけとさくらむとで家内殊うびり方知ま  
まをふつて若旦那が病氣の全快おあえんでも大よりり  
と毎日と化へも出まふれ替りて長年の的吉村隨士はあ

あつた阿嬭のまを業トて飛ぶのごとあつたさうその虚へ  
ぶつと付えんてまふ集りのゆりがけ管の下の時やま  
米屋の阿嬭が長嶺とさくらむ門附おありて飛ぶこと  
つんけさまどく宜加減おあつたさうが察一のあつた遠へ  
後へつんてえん若旦那が根より底よりせれとのとつけ  
の儀俵出さうめを働いて並に程をん合せ四用金  
三百足と四拜備と後のおけさう子速のおあまをまはせ  
おね及ぶののお備中さくらむさくらむおあまをまはせ





のどが自分の安ホト集まらん房の境さへりここの角公可  
笑さうさうおどろいであせ方ののよまが向ふのよまのあま入に  
もみおほのお下が金なんと若止那も障り人よりのお坊さん  
ぢやア祐分うと使えお務の糸は顔安の糸とあつとうん  
モウ勝らしのおあえんのけねたね人かうさくお成ごま  
とのののつ法あるが好でもえせ出運る職人とあつとうん  
合とけ成さう悪いのごねえんの劫南とあつとうん  
も公理のあの殊おモウ肝がけさるのどがさるのト云さ

消し安ん年トを肝の漬さるさうりああどあつとうん  
お運入てあるとらつて奥の人とさうさうに此処へ来て房の  
ざらう自己ゆそのをりまね柄柄のけねへお務と一むの  
隙にけさう一寸と二分に融るしゆ云さる人あやアねさ  
虚言ゆ方便ぢもさうんさあで一盃飲べらうとあナ  
ねみささうさうのとさのさうあ云ん殊おモウあまのさねさ  
人おあ成ごま下云つ種打とりあげん的とあまさうけ処の  
勘定お私があま子ヨそくお金か云さの家へあるとさあ



てもかんての借入よりうそのお金の事をつけろの心算と  
 ねまふお返しまじいおは舞をそのヨ世でもおまひごと  
 ね又さんお付ますヨかんご百成婆とつんご招おや  
 まのゆをうりいんたふお世信は酒でもあましと云  
 て馬一盃お手と芳しつらつらとカチカチカチト番太  
 爺さんが心の書出とねくまらアホ三成刻お成ちやア  
 大愛ごらんお酒これごらんは信のますヨ降り大さうお  
 解ごと後とまう水気とまうろ家へ入のん枕論と出す

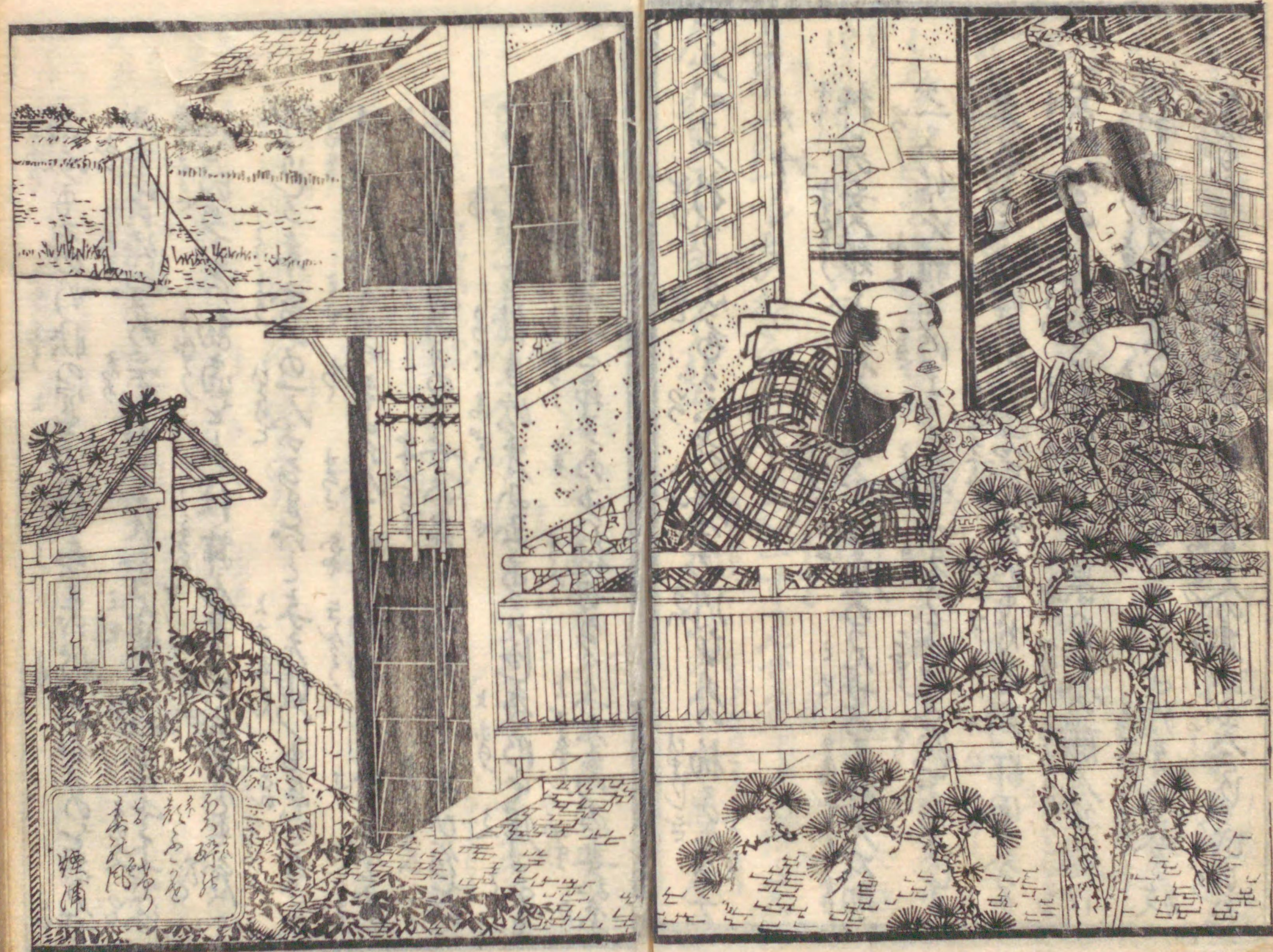
う  
 平みとありやアあるの「解」が解不と固くわろ男とつ  
 む何程金とまるとのり除を安くりあ人ぞ「そやアの  
 う安さん先利たごの解しとあう私のお後らつとまお  
 遠ひはのうう何程とつらうとあかといふ成入夜  
 ちろくあお舞らまるとのりまごうゆりそ業ごの除た何程  
 う志望うとあけまごあると死とのかう方一死ごするとま  
 さらあお逢ゆの出来はまご角孕て来こののと勝  
 勝くあつは符のり可電つらああさうどア何程とつら











煙浦  
春風  
花鳥  
色色  
如如



忠女もそのり状の定まらぬとあはれが彼招きよめとおん世  
おまへに他ののよふがさうばあつんせと引こき上で孫  
心と改めざり初通とん仕舞んきと云出さともかた  
たりしが来あての一人おの思ひとよた通つも是とあざあ  
そまき こそあ ますこ ちや さんかう さま さま  
まはれぬけんせへをのの全く祝の初功なり数見べよこ  
あつんせ こそせ ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あつんせ こそせ ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あつんせ こそせ ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あつんせ こそせ ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あつんせ こそせ ちやんかう ちやんかう ちやんかう

英が婢女お正使おお務の年まこ十九二十めんも宿兒  
のよさのこもるんをいを優しく方おつけてたまふ  
しが急の癖おお素のち何指ささめの却合お安ん命  
と深く別添今宵も互お浴室お使と回辺のりのあか  
梅は処おまおん逢りのあり  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう  
あま ちやんかう ちやんかう ちやんかう ちやんかう







とて揆考するに二休練子

「まも初遊ひ出らるるあづき遠坂の園遊後小

遊の遊も美濃尾張に宮もあるまじく小月遊

漬し物もあるゆゆの陳ぶるよふ山出ら

下寂る言不竹本の二櫛頃よその処へなりかりしよ三節

人と捨つ子をづらへ暫時唱あそびせりしがはては方々

要ん歩りるるの一人云「まろくも移り過ぎむむむむむむ

の顔もんをせせせせと猶陸乳不成てむむむむむむ

新内や祭文の門附あはれ刻ッるる何れも出ッるるいし長

頃とてとて来る奴あまご一人もまねあまの軍がまう何れ

ごまん由も移るねあの小降り夜と来しものつまね

どうせ一晩や二晩来とて軍あまあま付る親あま

あまを思ふと我身あまらるる麻とくし振どけきと彼様

身の上も流あまもあまあまらるるん捨ととの小後ま何

酒胸と女も世も念いのころわが零落とてせせけ何

卒達へ寄るをせせせせと下りさういん所へもまをんと



けとどけとのみも肝心の山本もつらまゝ移入ける  
仕方がね下拘り手を絶望するに性かりたる人の門  
性来の人の群をとりやと身と縁にて笑ひ能優れ  
身振とららる

「九百九十の寺へ毎日入る初夜に肥日その由  
今居る肥その由今日も今固まるとあるよといふ  
平多は奴もまゝ石臺丸の存あるは笑さくも移入る  
云イヤな指のりありの向ふに笑ひ笑とのつて頼とも志す不

此方が傍身と耳とあぐらとをうりつて指も中降り理のあり  
新心もむ可電さうふ先の奴こそ割み合ねるも  
あふも方あかあるホシク我かぞう迷へば指もある  
あつ果さけらる可笑やうと一人微笑と僅まお  
うらまゝの由笑ひの二條線の喜みのうら長唄や物処  
の誰の圖思君う麻一人のちの是人を悟りとあつ金  
且の家の内ああるはく遠彼方の町中に入の想  
門附う義史かうが是あそと心のうちお収りは是成早









の能く定めてと後みつた花不成り  
手拭と採由除給が珍方は  
附くはるがうまも人うもぬう  
やあふりけりとは長びつ  
ぞとのあるやあまや彼し女  
校やうかる踏次へ入籍し  
の定を尾尾程とゆふ中より  
いぬもぬつぬこ女夜呆え  
なうり忙然らしかと三希  
おは昔芳千萬ど歩め  
後むお彼方よりして喘ぎ  
いげふけ踏込へ運入横顔  
後と尾をさぶくお後上と  
気の遠びうお怖とるふ  
ん松るあふらお松を馬  
滅めて夜いおの候ゆり  
なうり忙然らしかと三希  
おは昔芳千萬ど歩め  
後むお彼方よりして喘ぎ  
いげふけ踏込へ運入横顔  
後と尾をさぶくお後上と  
気の遠びうお怖とるふ  
ん松るあふらお松を馬  
滅めて夜いおの候ゆり

なうり忙然らしかと三希  
おは昔芳千萬ど歩め  
後むお彼方よりして喘ぎ  
いげふけ踏込へ運入横顔  
後と尾をさぶくお後上と  
気の遠びうお怖とるふ  
ん松るあふらお松を馬  
滅めて夜いおの候ゆり













お入屋者へ納めねば候ものも出来まじく律義な性質  
の物だえん此面家長は徳あるも手具衣靴を残り  
るゝ賣代あるも是れを何れにせよ彼れを調へお  
出八屋者へ納めれば候ものも出来まじく律義な性質  
身内もちう山根町の重屋住りて是れを調へお  
自分お恵ひするものも出来まじく律義な性質  
りもあらうと頼む甲斐あるも是れを調へお  
が元月物の紅毛巾初冬のうら終りの重屋住りの身内彼れ  
お入屋者へ納めねば候ものも出来まじく律義な性質  
迎の送のうら終りの重屋住りの身内彼れ  
候ものも出来まじく律義な性質  
あまうと娘ぬまひのその中へんも知りませぬ人があて親  
父さんがお在のうら五十あとの入金を信へ上と征交り是  
らあり此処におある何卒帰して貰ひたいと申す出来まじく  
私と連て性々女希ふ買と毎日と責債らと意母  
えん物柄の藤今日で四又日りのとも給むけは人母また

お入屋者へ納めねば候ものも出来まじく律義な性質  
の物だえん此面家長は徳あるも手具衣靴を残り  
るゝ賣代あるも是れを何れにせよ彼れを調へお  
出八屋者へ納めれば候ものも出来まじく律義な性質  
身内もちう山根町の重屋住りて是れを調へお  
自分お恵ひするものも出来まじく律義な性質  
りもあらうと頼む甲斐あるも是れを調へお  
が元月物の紅毛巾初冬のうら終りの重屋住りの身内彼れ







Illustration calligraphy:  
無うけと  
やう船  
おんもろ  
春は解  
其先



8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
120  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
110  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1

若葉一け世おお在るの根お成さるんお何根せうと必  
へげ物由張さ衰しと恐怖お忘まて只一人け処の比書  
毎夜のお百皮廣の世の憂疑を今一人の身の上お  
負うとあふその中おゆそ君の如何お成さると壯麻の  
角の束の乃由忘あひひまの必けとど彼根をさるるの  
身お成ての確信お忘まて死びとて同言信が成せう必  
ね不実お世の成りお推量しへ中さりまると洞わら  
あり紙方の身お降積の災害を捨は現まてよと神由

我と忘まて一葉ひ返洞眼を指りて拭ひ一丈の  
の災難ははれは又洞がある左根のふと早く知して  
立流するの出来さるの心お世の仕根もあさうお後の  
ありて是非あるのがモウくらくく成てさるの意母さん  
とおおらさるの何根かりとて責てあけるそく亦平  
あのお今このものゆりあよるさるに根おやいさるのゆ  
知してあのお憐れ親を人ののちあてんまの仕方があ  
うまおにみ目のうち初念とて返してよき根を











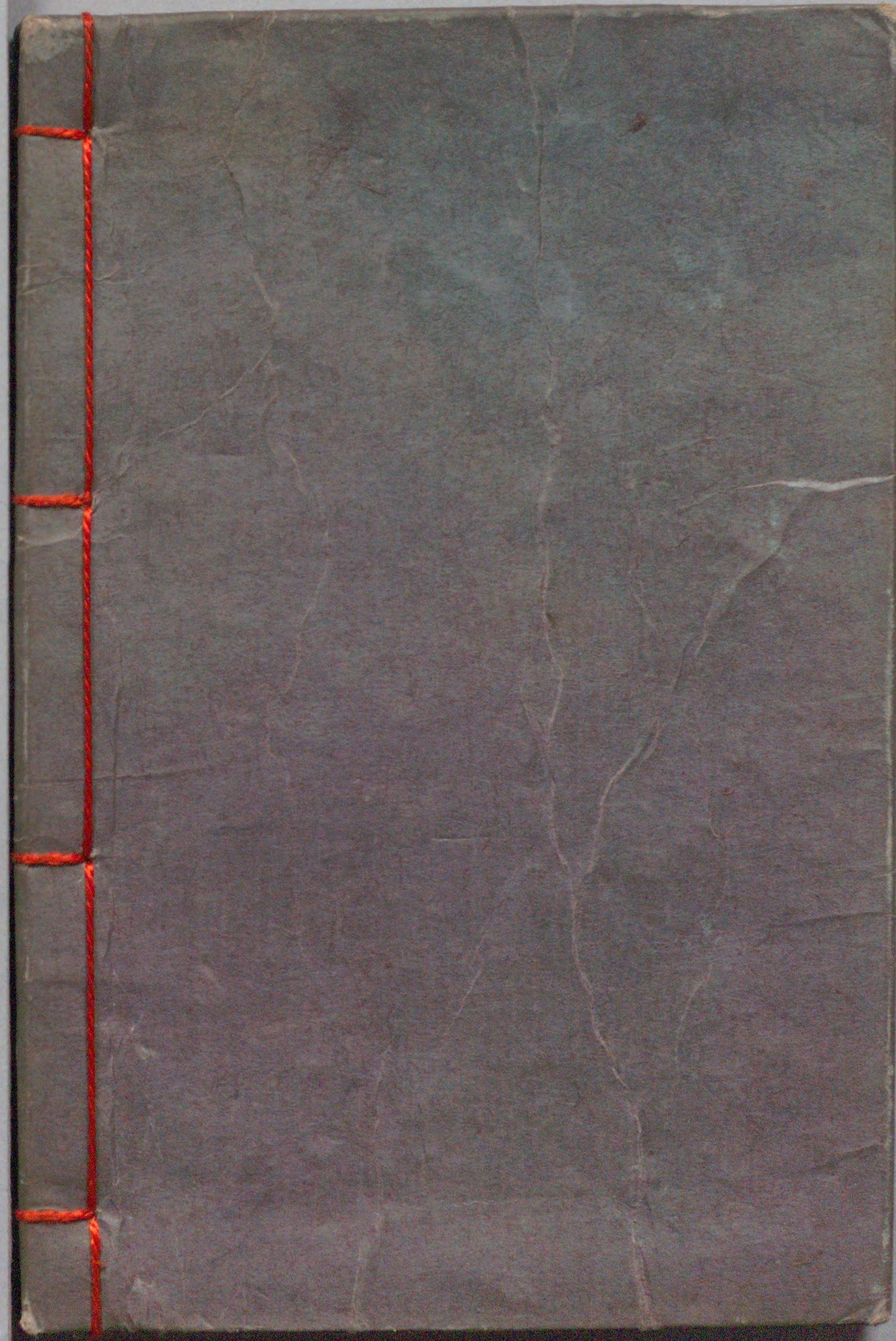
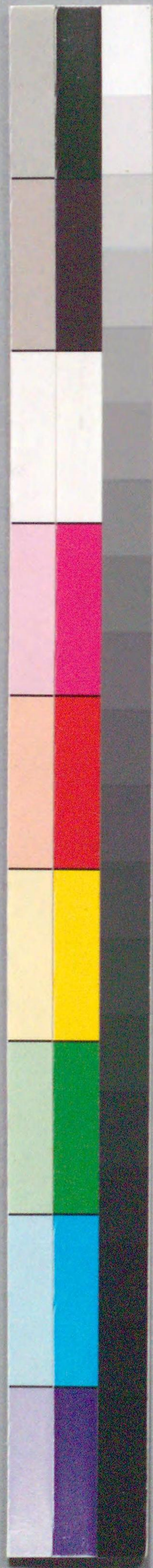
208  
15  
751

柳の横櫛巻之終

麻糸と煙屈がそのことト是より安んぬ編みしこと  
門附ふまへ山服町まへなり手内お家とてうけりるる連  
妻殿のござるとはつらつ極む切みよに帯が知りたふし  
栴のいと文不と追ふる言へ下さるとい何栴のい田縁う保  
ふまへト後口隠る痔しほ一ホイ世廻らりト云るがう所栴の  
彼方の料理屋へお家と引連

運入けり





国立国会図書館 柳横櫛 5編15巻 208-751

ガラス使用